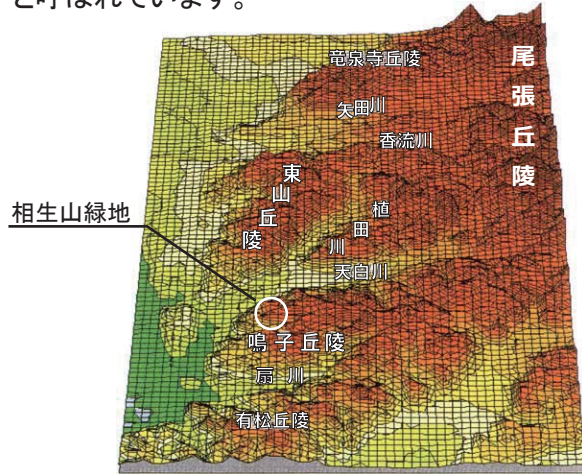


《特集!》 相生山の歴史 ～地形・地質編～

《尾張丘陵と東海湖》

◆丘陵地形

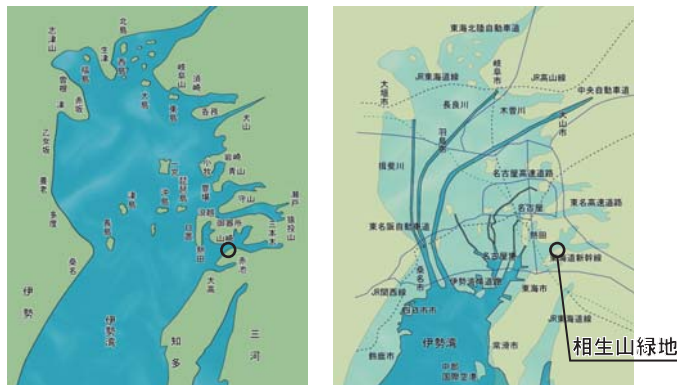
名古屋東部に位置する守山区、名東区、天白区、緑区などの地域は起伏のある丘陵地で、全体で「**尾張丘陵**」と呼ばれています。



名古屋東部丘陵地のブロックダイアグラム
出典：なごやの森づくりガイドライン(案)平成24年7月

◆東海湖

古代、名古屋は東海湖という湖の中心に位置していました。この東海湖が隆起し、半島として名古屋台地が形成されました。その表土は瀬戸、常滑方面や滋賀県に流れ、現在の良質な陶器の原料となっています。



古代の地形 古代と現代の地形比較
出典：Network2010
URL <http://network2010.org/article/468>



相生山で見つけた珪化木

前回に引き続き相生山周辺の歴史について紹介します。今回は、地形や地質の歴史に注目して見てみましょう。今度相生山を散策する時は、足元にある地面にも注意してみてください。新しい発見があるかもしれません。

◆丘陵を構成する地層

尾張丘陵の地質は、650～100万年前に現在の伊勢湾およびその周辺に形成されていた**東海湖**とよばれる広大な淡水湖と、それを取り巻く地域に厚く堆積した、砂・シルト・粘土から形成されており、そのうち尾張丘陵の地域に堆積したものを**矢田川累層**と呼んでいます。

矢田川累層は下層から砂礫層・泥質層・礫層に区分され、庄内川以南の地域では矢田川累層の上部のみが分布しています。

第四紀(170万年前～現在)の時代に入ると、東海湖は次第に消滅し、断層地塊運動によってブロック的な隆起・沈降地域が出現しました。

名古屋周辺の地域では、第四紀中期以降、猿投山から知多半島の地域が隆起帯(猿投-知多上昇帯)として上昇し、東側の西三河平野と西側の濃尾平野とに分化しました。

東海湖域で堆積した地層群の名称として、濃尾平野より東のものは瀬戸層群、知多半島のものは常滑層群、伊勢湾西岸部のものは奄芸層群と呼ばれています。これらは同一の堆積盆地内で時間的にも空間的にも連続して形成された地層群で、東海層群と総称されることがあります。

この尾張丘陵の地域では、東海湖をつくった沈降運動は250万年前頃までに終了し、第四紀に入ると矢田川累層を不整合に覆って唐山層・**八事層**が堆積しました。

参考：なごやの森づくりガイドライン(案)平成24年7月

《相生山緑地の地質》

◆鳴子丘陵

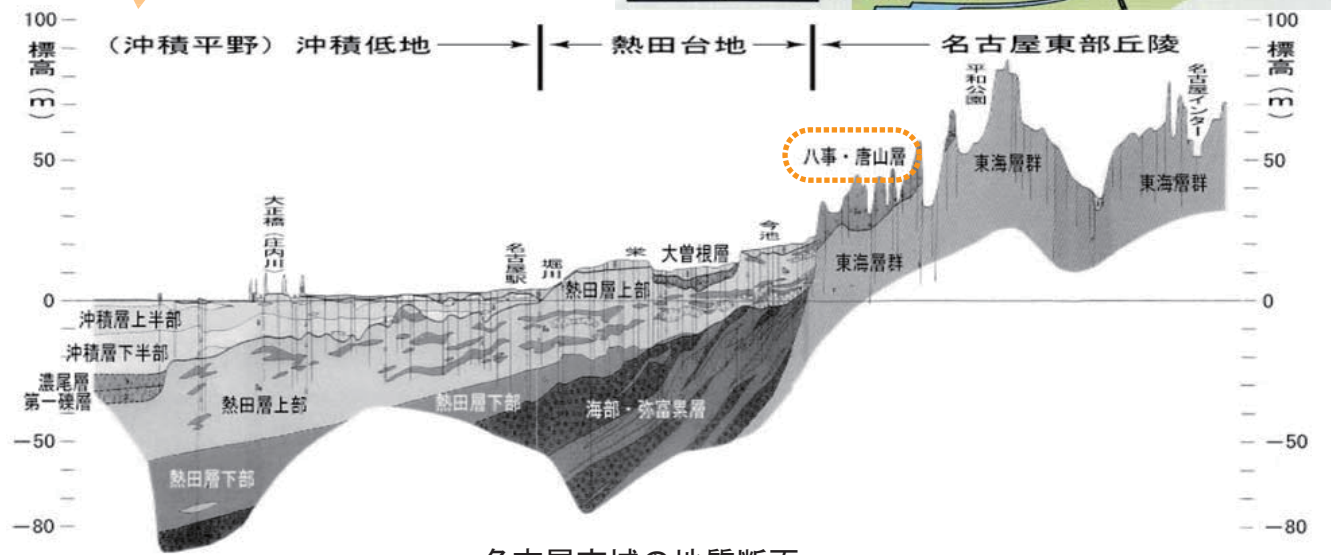
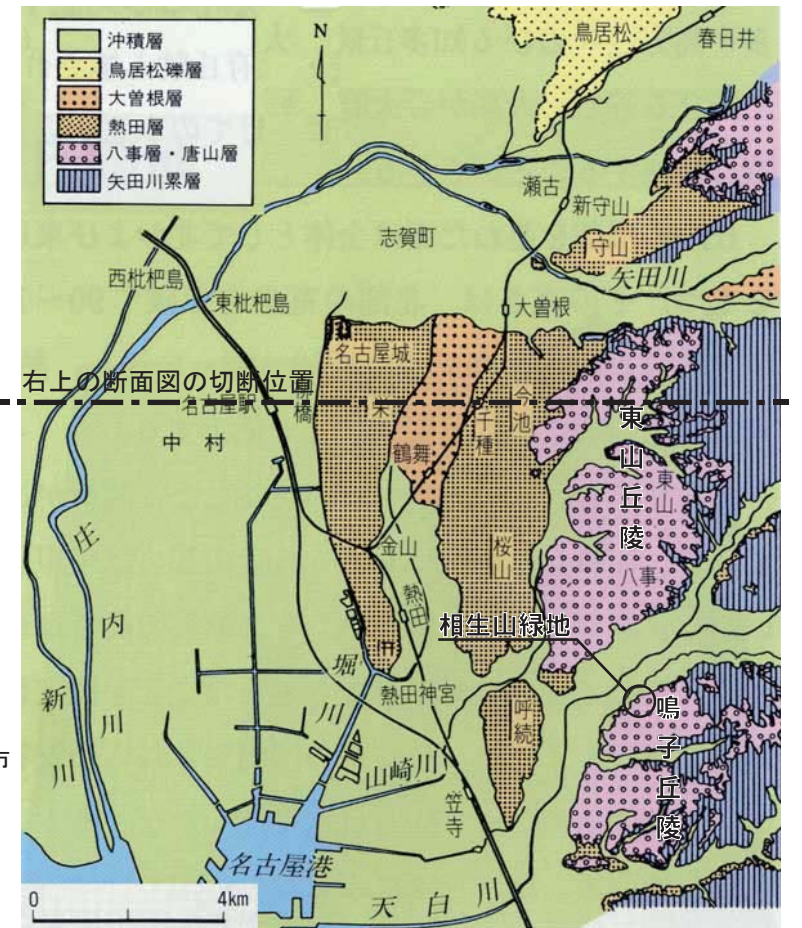
相生山緑地は、名古屋市東部に広がる尾張丘陵の細区分で、天白川と扇川に挟まれた鳴子丘陵と呼ばれる丘陵地内に位置しています。鳴子丘陵地内には、中小の河川から伸びる樹枝状の支谷が発達し、細かく複雑に侵食されています。相生山緑地内には東西に走る標高10～60mの3条の台地と2条の谷筋が存在しています。

鳴子丘陵は、瀬戸層群矢田川累層とそれを不整合に覆う**八事層**により構成されています。丘陵地形は、標高100m以下の定高性を有する稜線を伴うなだらかな丘陵地形をなして、北東より南西方向に緩やかに傾斜しています。なお、丘陵地形で八事層の作る地形面は八事面と呼ばれ、天白川を挟む北方の東山丘陵に連続して分布しています。

《名古屋市域の地質》

名古屋市域の地質概略図

出典：新修名古屋市史 第八巻 自然編
編集：新修名古屋史編集委員会
発行：平成9年3月31日 名古屋市



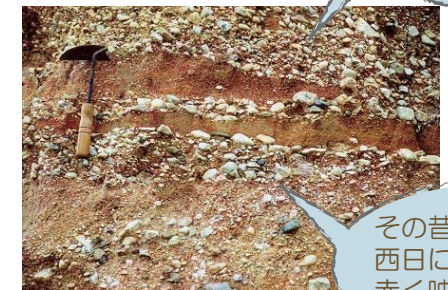
名古屋市域の地質断面

出典：土質工学会中部支部編著「最新名古屋地盤図」1987 ほか

◆八事層

八事層は、天白川を挟んで北の東山丘陵と南の鳴子丘陵に広く連続的に分布しています。全体としては主に礫層より形成された乾燥した地層で、層厚は東山丘陵で30m程度、鳴子丘陵西部では50m以上となっています。

主要な部分は、礫の密集した部分とあまり密集していない砂礫質の部分とが繰返し不明瞭ながら層をなしています。礫と礫の間は、花崗質の粗い粘土でできた全国的にも珍しい「古赤黄色土」で、風化により著しい赤褐色を呈しているため、礫層全体に赤っぽい色調を与えています。



八事層

八事層の土は、カオリン鉱物のメタハロイサイトという粘土層

その昔、相生山は西日に映えて赤く映ったそうです。